

心一つに課題に挑戦

山形商工会議所青年部会長

小林 寛治氏



令和2年度の山形商工会議所青年部会長の重責を担うこととなりました。歴史と伝統を築いてきた青年部諸先輩の後を受け継ぎ、今年で32回目を迎える日本一の芋煮会フェスティバルをはじめ、活気ある地域づくりに邁進したいと決意しています。本年度のスローガンを「^{たばや}東矢一心を一つに、地域の未来のために～」としました。文字通り95名からなる青年部全員が気持ちを束にして様々な事業を推進しよう、という思いを込めました。

私は1978年に山形市に生まれました。東北芸術工科大学デザイン工学部で建築・都市計画（環境デザイン）を学び、卒業後は山形市内の印刷会社に10年間勤めたのち、父が創業した生命・損害等の保険代理業（ケーアイシー）を継

いでいます。仕事（経済活動）と地域とのつながり（社会活動）を両立させたいと考えていたとき、青年部の講師例会に参加し、山形屋台村ほっとなる横丁を立ち上げた渡辺隆博氏の講演に触発され入会しました。8年前のことです。

入会2年目に日本一芋煮会フェスティバル委員会の茶屋部会長、翌年に大鍋の調理部会長、4年目に事務局長、5年目に3代目鍋太郎を製作するために設けられた大鍋プロジェクト総務部長を担当。さらに会務理事、専務理事を務めました。

その間、多くのことを学ばせていただきました。青年部の活動は必ずしも自分の利益に直結するとは限りません。入会したからといって仲間ができるものではありません。様々な事業活動に一人ひとりが本気で取り組むことが大切であるということです。

「楽（らく）か楽（たの）しいか」。私は手帳に記しています。つらいことから逃げ出す「楽」ではなく、つらい事を乗り越えて得られる「楽しさ」を実現するとことで、かけがえない仲間をつくることができ、自らの仕事、そして地域に元気をもたらすことができると思います。

先月、個性あふれる49年組（昭和49年生まれ）15人の卒業例会を開催しました。会員の大幅減が懸念されましたが、長沢太一前会長をはじめ、会員拡大委員会の努力により、現状を維持することができました。6月には友好関係にある新潟県村上商工会議所青年部を訪問します。鮭文化と城下町のたたずまいを活かしたまちづくりを学んでいきます。30歳代の会員は6年後の東北ブロック大会を山形に誘致するため、会員を50人増の150人台を目指しています。

我々青年部が挑戦する課題は多く、可能性は無限です。会議所会員の皆さまのご支援よろしくお願いたします。